

	書	名	と	主	題
	落	穂	拾	い	

交響曲第3番=短調「ワグナー」。このブルックナーの曲を、恥ずかしくもワグナー自身の曲だと思っていた。レコードを買い集める金もなく、神田日活裏の珈琲店「ランブル」あたりで、クラシック音楽を聴き漁り始めた頃だった。

レコード・ジャケット。映画の看板。貸部屋広告。本の背文字。どれにしても、一瞥了解の早合点、とんでもない恥さらしとなる。まして書物相手の職業に入って、しかも各々の図書分類、件名付与が日日の仕事となつてからは、恥の掻き捨て御免では済まされなくなった。

書名がどの程度、そのまま主題を表現しているのか。書店で棚を見まわすとき、新刊書の新聞広告をながめるとき、書名=主題がどれくらいあるのか気になる。洋書の分類担当から和書のほうへ先年の4月に移つてからは、その関心がなおさらつよくなった。書名あるいは書名の一部だけを手懸りに、分類・件名付与ができれば、骨惜しみと能率アップが手に入る。コンピュータに読み取らせての自動処理も可能なはずだ。

『図書館学の五法則』の著者S・K・ランガナタンの法則の第3番目は、くいつれの図書にもすべて、その読者を>である。どんな本にも、必ず読者が潜在的にせよ存在するはずだから、図書館員は目録、書架排列、レファレンス・サービスなどでその読者をその図書へ導けという。有能な

ライブラリアンの手中にあっては、図書館は万華鏡のようなもの。万華鏡を回転させ、すべての面を観察できるようにし、各々の面が利用者の関心を惹くようにするのが法則に叶うと。

その万華鏡の中でも、書名は主題を手繰るに欠かせないのだが、『山口百恵は菩薩である』に「信仰」、『死んだ猫の101の利用法』には「廃物利用」の件名など付いてない。

書名と主題(件名)の関係は、実際にはどうなのか。国立国会図書館と図書データ(83年1月現在)から端末機で呼び出して、おもいつくまま「ロック音楽」に関してやってみよう。

書名に「ロック」が含まれるもの53件(但し「ロックンロール」や「Rock」は除く)。この53件すべてがロック音楽に関する図書ではない。『ジョン・ロック研究』、『ジョン・ロックと主権理論』などは、なるほどと思うが、『ロックボルト工の現場設計法に関する研究報告書』となると、書名の読みの分かち書きの難しさ、「ロック」のノイズというしかない。

次に件名「ロック音楽」付与のもので、書名に「ロック」が含まれない(前出53件に含まれない)ものが14件。『十中八九は御乱心』、『多量な音の時代』、『ピンク・フロイド』、『ディランにはじまる』など。「ロック」に関する限り、著者や副書名も併せて検索の手懸りにすれば、主題は書名から概ね掴めそうだが、『ディランにはじまる』などはディラン・トマスに関するものかと、またぞろ早合点して恥を掻きそうだ。

(収集整理部 千賀正之)